

明治四十年代の鷗外

喜 多 川 恒 男

一九〇七年（明治四十年）十一月、森鷗外は、陸軍軍医総監となり、陸軍省医務局長の椅子に就いた。鷗外、時に満四十五歳であった。これより五年間、一九一二年（明治四十五年・大正元年）九月の乃木希典夫妻の明治天皇大葬の日の殉死に至るまでの間、鷗外は、いわゆる思想小説もしくは問題小説といわれる作品を中心として旺盛な作家活動を再開している。これらの諸作品ならびにこの時期の鷗外の文学活動と、その活動を通して見られる鷗外の立脚点、基本的立場を把握、鷗外の最後の一〇年の変転への契機をさぐるため、明治四十年代の鷗外の主たる思想小説もしくは問題小説の、作品の構成、作品の主題について論及し、作品に即した立場から、鷗外の掘って立つ処を明らかにしたいと考えるのである。

正宗白鳥をはじめ、多くの人々と同様に、筆者もまた、『妄想』（一九一一年、三・四月、三田文学）を中心に置いて考えてみたい。

この作品は、〈白髪的主人〉が〈別荘の真似事のような心持で立てた此小家〉、〈上総の夷灘川〉の河口にあって、太平洋の見渡せる居間で、過去を回想するという形を採っている小説であるが、一九〇七年（明治四十年）に鷗外が、千葉県東海村字目在に立てた別荘、鷗荘を模した、自伝的な自己の基本的な考えを明らかにした作品と考えられる。

『妄想』で明らかになる第一の点は、西洋の自然科学への信頼である。

主人の翁はこの小家に来てからも幻影を追ふやうな昔の心持を無くしてしまふことは出来ない。そして既往を回顧してこんな事を思ふ。日の要求に安んぜない権利を持つてゐるものは、恐らくは只天才ばかりであらう。自然科学で大発明をするとか、哲学や芸術で大きい思想、大きい作品を生み出すとか云ふ境地に立つたら、自分も現在に満足したのではあるまいか。

また、

凡ての人為のものの無常の中で、最も大きい未来を有してゐるものの一つは、矢張科学であらう。

とも、この白髪的主人は思ふのである。

このような、主人公の自然科学への信頼も、当時の日本にそれを持ち帰って定着させ、育てられるかについては、不安と疑念を抱かすにはおれない。

留学三年の期間が過ぎて、故国日本へ帰ろうとするにあつての、若き日を回想して、若き主人公の思いを綴つて、自分の研究しなくてはならないことになつてゐる學術を真に研究するには、その學術の新しい田地を開墾して行くには、まだ種々の要約の欠けてゐる国に帰るのは残惜しい。敢て「まだ」と云ふ。

また、

自然科学の分科の上では、自分は結論だけを持つて帰るのではない。将来発展すべき萌芽を持つてゐる積りである。併し帰つて行く故郷には、その萌芽を育てる雰囲気が無い。少くも「まだ」無い。その萌芽も徒らに枯れてしまひはすまいかと氣遣はれる。

もっとも、主人公は、日本人としての自負も「まだ」の一語に込めてはいる。

自分は日本人を、そう絶望しなくてはならない程、無能な種族だとも思はないから、敢て「まだ」と云ふ。自分は日本で結んだ學術の果実を歌羅巴へ輸出する時、もいつかは来るだらうと、其時から思つてゐたのである。

このような、自然科学への信頼と、将来、日本にて、自然科学を定着させようという積極的な主人公の意志も、事、
「哲学」や「形而上学」となると、そうはいかないのである。

この陰気な闇を照破する光明のある哲学は、我行李の中には無かつた。その中に有るのは、シヨオペンハウエル、ハルトマン系の厭世哲学である。現象世界を有るより無い方が好いとしてゐる哲学である。進化を認めないではない。併しそれは無に醒覚せんが為めの

進化である。

また、

辻に立つ人は多くの師に逢つて、一人の主にも逢はなかつた。そしてどんなに巧みに組み立てた形而上学でも、一篇の抒情詩に等しいものだと言ふことを知つた。

主人公は、西洋の学問を学ぶことに食欲ではあつたが、なんでも西洋の物ならよいとは考えはしていない。

自分は失望を以て故郷の人に迎へられた。それは無理も無い。自分のやうな洋行帰りはこれまで例の無い事であつたからである。これまでの洋行帰りは、希望に輝く顔をして、行李の中から道具を出して、何か新しい手品を取り立てて御覧に入れることになつてゐた。自分は丁度その反対の事をしたのである。

この後、東京という都会の「改造の議論」、「食物改良の議論」、「仮名遣改良の議論」について、

人の改良しやうとしてゐる、あらゆる方面に向つて、自分は本の空阿弥説を唱へた。そして保守党の仲間になつて逐ひ込まれた。洋行帰りの保守主義者は、後には別な動機で流行し出したが、元祖は自分であつたのかも知れない。

主人公は、このようにして、今日、次第に老いを迎へての心境を次の様に記すのである。

目の要求に應じて能事畢るとするには足ることを知らなくてはならない。足ることを知るといふことが、自分には出来ない。自分は永遠なる不平家である。どうしても自分のゐない筈の所に自分があるやうである。

また、

自分は此尽で人生の下り坂を下つて行く。そしてその下り果てた所が死だといふことを知つてゐる。

併しその死はこはくない。人の説に、老年になるに従つて増長するといふ「死の恐怖」が、自分には無い。この作品の終り近くには、

かくして最早幾何もなくなつてゐる生涯の残余を、見果てぬ夢の心持で、死を恐れず、死にあこがれずに、主人の翁は送つてゐる。

このように、『妄想』の各所に散見する言葉から総合してみると、この「白髪的主人」は、次のような考えを持ち、また、境地にあると判断できるのである。

一、西洋の自然科学への信頼が強い。

一、哲学や形而上学への関心が深いが、人生を達観できる哲学は身につけていない。

一、西洋を無批判に採り入れるのではなく、日本固有のものを尊重し、日本に適合するように合理的に西洋を採り入れようとしている。

一、何か人生に満たされない思いを抱く不平家である。

一、「死」については、怖れもせず、憧れもせずに、人生の下り坂を下って行く。

一、多くの師には逢ったが、一人の主には逢わなかった。以上のようなことが、明らかにするのであるが、これらは、『妄想』以前、もしくは以後の作品に、全部にはないが、ところどころに散見されるのである。

二

『普請中』（一九一〇年、五月、三田文学）では、渡辺参事官が、普請中の精養軒ホテルで、独逸時代の旧知のドイツ女性と待ち合わせた場面で、

「アメリカへ行くの。日本は駄目だつて。ウラジオで聞いて来たのだから。当にはしなくつてよ」

「それが好い。ロシアの次はアメリカが好からう。

日本はまだそんなに進んでいないからなあ。日本はまだ普請中だ。」

とあるが、これは、自然科学ならぬ芸術についてではある

が、日本の当時の遅れをあらわしている。また、

「キスをして上げても好くつて。」

渡辺はわざとらしく顔を蹙めた。「ここは日本だ。」

これは、キスの習慣が日本にはないことを言っている。

もちろん、女性へのかつての想いが失せているからではあるにしても、西洋の習慣をむやみに日本へ持ち込まない姿勢ははっきりと見えている。

『カズイスチカ』（一九一一年二月、三田文学）は、新しい西洋医学を身につけた花房医学士と開業医のその父が登場するが、落架風Ⅱ下顎脱臼、一枚板Ⅱ破傷風、生理的腫瘍Ⅱ妊娠の三患者を花房医学士が、新しい医学知識を身につけて、見事に診断したり、治療する話であるが、そこには、『妄想』における自然科学への信頼、すなわち、ここでは、西洋医学への信頼が見られる。その一方で、見落せない大切な問題を「カズイスチカ」は示している。

花房医学士は何かしたい事若くはする等の事があつて、それをせずに姑く病人を見てゐるといふ心持である。それだから、同じ病人を見ても、平凡な病だと詰まらなく思ふ。

（中略）

始終何か更にしたい事、する筈の事があるやうに思

つてゐる。併してそのしたい事、する筈の事はなんだから分らない。

(中略)

何をしてゐても同じ事で、これをしてしまつて、片付けて置いて、それからといふやうな考をしてゐる。それからどうするのだから分らない。

こういう花房医学士に対して、父の方は、

翁は病人を見てゐる間は、全幅の精神を以て病人を見てゐる。そして其病人が軽からうが重からうが、鼻風だらうが必死の病だらうが、同じ態度でこれに對してゐる。盆栽を翫んでゐる時もその通りである。茶を啜つてゐる時もその通りである。

また、

自分が遠い向うに或物を望んで、目前の事を好い加減に済ませて行くのに反して、父は詰まらない日常の事にも全幅の精神を傾注してゐるといふ事に気が附いた。宿場の医者たるに安んじてゐる父の *reignation* レジニエーション の態度が、有道者の両目に近いといふことが、臍氣ながら見えて来た。そして其時から遽に父を尊敬する念を生じた。

『カズイスチカ』での花房医学士のへ父に及び難いへと

ころは、『妄想』における「白髪的主人」の「未来の幻影を逐うて、現在の事実を蔑にする自分」という点にあるはずである。花房医学士には、少しわかりかけてきたとはいへ、まだレジニアション（諦念）の積極的な意味はわかっていなかった。この問題は、鵜外の最後の十年のうち、少くとも、一九一六年、鵜外数え年五十五歳になって、『涇江抽斎』や『高瀬舟』を世に問うまでは、完全に形象化できなかったものであった。一九一二年の明治天皇の大葬の日、乃木夫妻の殉死を扱った、『興津弥五右衛門の遺書』や、その後の歴史小説の殉死物では、まだ、真のレジニエーションの境地には達していない。それは、まだ、世に顕在化するところが捨てきれないでいるからであらう。

『杯』は、比喩的言まわしの多すぎる短篇であるが、鵜外の反自然主義的立場は明らかである。八人の娘のうち、第八の娘だけが他の七人の娘と違う杯を持っている。七人の娘の持っている杯は、

銀の杯はお揃で、どれも二字の銘がある。それは自然の二字である。

それに対して、第八の娘のは、

黒ずんだ、小さい杯

である。

七人の娘のうちの一人があわれみの声で、

「あたいのを借さうかしら」

というと、第八の娘は、

「わたくしの杯は大きくはございません。それでも

わたくしはわたしの杯で戴きます」

と云う。

これは、鷗外の、自分は、あくまでも、自分の文学の在り方を守るという意志表示をした作品と見られるのである。

三

一九一〇年『大逆事件』が起こり、幸徳秋水以下多数が捕えられ、翌年一月判決があり、死刑を言い渡されたうち減刑された者もあったが秋水等の幹部は死刑に処せられた。これに対する鷗外の態度は、同年十一月の『沈黙の塔』や、十二月の『食堂』、共に三田文学に掲載された小説に示されている。前者、『沈黙の塔』は、危険な書物を読む奴を殺して、その死骸を運ぶというのである。危険な洋書が自然主義と社会主義という危険思考を伝え、それを翻訳したり、制作したりするのは、西洋人まがいの舶来の危険物を製造するというわけである。鷗外自身、前半に出版した『キタ・セタスアリス』が出版禁止になった事も手伝って、

社会主義や無政府主義の洋書やその翻訳を読んだだけで、危険人物としたり、自然主義作家が、本来、因襲を脱して、自然に復ろうとする文芸上の運動者であるのに、〈風俗を壊乱する〉としてのその作品が出版禁止にされることに抵抗して書いたものと見なしうる。一方、後者では、登場人物は、犬塚、山田、木村の三人で、役所の食堂で昼飯を食べながら、大逆事件を示唆する事件の話を三人で交わす内容である。犬塚は、へなんでも犬塚に知られた事は、直ぐ上の方まで聞こえる」というへ鳥さしがそつと覗ひ寄つて、くくるのに似た気を許せない人物であり、山田は、へおとなしい。好人物だが、無知である。木村は、無政府主義や虚無主義についての知識が豊富で、その説明役であるが、

「あんな連中がこれから殖えられてたまるものか」と犬塚が答え、「木村君、どうだらう」と、山田が不安顔にきくのに対して、木村は、

先づお国柄だから、当局が巧に柁を取つて行けば、殖えずに済むだらう。併し遣りやうでは、激成するといふやうな傾きを生じ兼ねない。その候補者はどんな人間かと云ふと、あらゆる不遇な人間だね。先年壮士になつたやうな人間だね。

と答える。鷗外を代弁するのは、木村であろうが、へお国

柄」を強調はしているが、当局の在り方に善処を求めている点は、鷗外の軍医総監、陸軍省医務局長という立場からすれば、むしろ、大逆事件の被告たちに同情的であったと見なしてよい。しかし、この事件があつて、鷗外は、翌年一月、中央公論に『かのやうに』を書かざるを得なかったのである。

『かのやうに』(一九二・一月 中央公論)は、『食堂』に出てくる「お国柄」にかかわつて、主人公、五条秀麿がドイツのベルリンへ歴史学の研究に留学するが、『歴史と神話』の問題をめぐる、父親に自分が危険思想など持っていないと安心させるために「かのやうに」の立場に立つことを友人の画家、綾小路に説明する。が、綾小路は秀麿の「所詮父と妥協して遣る望はあるまいかね。」に対して、「駄目、駄目」と答えるのである。

『かのやうに』の五条秀麿・その父・友人綾小路の三者を比較して、五条秀麿と父との関係は明瞭であるが、綾小路の役割は、一般に考えられるより大きい存在と考えられる。

父親は、秀麿を「恐多いが皇室の藩屏になつて、身分相応な働き」をしてくれたらよいと考え、「神話と歴史とをはっきり考へ分けると同時に、先祖その外の神霊の存在は

疑問になつて来るのである。さうなつた前途には恐ろしい危険が横はつてゐはすまいか」と危ぶんでいる。息子「危険思想」にとりつかれず、「穏健な思想を養つて、国家の用に立つ人物になつて帰つてくれ」と思っている。

秀麿の方は、何とか「かのやうに」の説で父を説得したいと考えているが、父親に説く前に、友人綾小路の前で、所説を展開するが、綾小路は「駄目だ」と言い、綾小路は「八方塞がりになつたら、突貫して行く積りで、なぜ遣らない。」と迫り、うちをかけ、秀麿の「所詮父と妥協して遣る望はあるまいかね。」に、「駄目、駄目」と綾小路が言うところで作品は終っている。これは、構成上、明らかに鷗外は、「かのやうに」の秀麿の考えを、綾小路によつて否定させることで、「かのやうに」の論を葬り去ったことになると考えてよからう。そういう意味で、秀麿だけを中心人物と見ず、綾小路の作品中に占める重要性を考えるべきであろうと思われる。鷗外は、当時、陸軍省の重要な位置にはいたが、決して「国体護持」のために、自らの考えを曲げてまで、「皇室の藩屏」たらんとしたのではなかつたろうと考えられる。前述した諸小説において、鷗外は、登場人物の配置について、用意周到な想をめぐらしており、とくに、政治的な問題とからむようなときには、複数者に

自分の考えを分散させる恰好をとっている。もしくは、きわめて客観的な解説役をさせている。このような事柄は、鷗外が、政治とかかわる事件や問題について、きわめて慎重な態度に終始するか、自己の本心を隠して、周囲の圧力に抵抗していた姿とも見られる。

鷗外のこのような在り方は、当然鷗外自身にとって、自らはがゆい思いをせざるを得なかったはずで、鷗外の「不平」は、周囲に対してだけではなく、そういう自分の揺れ、優柔不断にも向けられていたはずであろう。

この期の鷗外の作品には、前述の五条秀麿と綾小路という『かのやうに』での登場人物が、それに、『普請中』の源辺参事官もまた、他の作品に登場する。このように、同一名の人物を登場させることで鷗外は何を企図したのであるうかを考えてみる必要があるように思われる。

『かのやうに』の秀麿と綾小路は『吃逆』に登場し、『藤棚』には、秀麿と渡辺参事官が登場する。前者は一九一二年（明治四十五年）五月、後者は、一九一二年（明治四十五年）六日の発言であり、『かのやうに』に遅れること約半年である。『かのやうに』での鷗外の揺れは、想像以上に深刻であったようである。というのも、この二作品は、一言でいえば、鷗外の虚無、すくなくとも内心の無聊の現われて

あると考えられるからである。

『吃逆』の題名は、吃逆をする芸者が登場するからであるが、この芸者の吃逆以外には、話らしい話もなく、まあ、幣原というオイケン先生に師事したヨーロッパ帰りの学者の話が、『かのやうに』にかかわる程度で後は他愛のない話である。『藤棚』もまた、五条秀麿が、音楽会に出掛けて、ベルリンで逢った渡辺参事官という『普請中』に出てくる人物との休憩時の会話以外にとりたてて問題にすべきものもない作品である。どちらも、主人公が無聊の日々を宴会や音楽会の招きにその無聊を一時的に解消しようということがあるが、共に出かける理由を言はなくては、家の人たちが異様に思うような状況に主人公は置かれている。こういう作品の発表は、明らかに『かのやうに』の後遺症ともいえるべきものであらうと思われる。鷗外にとっては、『藤棚』で、渡辺参事官を登場させたことにあらわれているように、無聊もしくは、解決のつかぬ虚無的心境にあったのであらうと思われる。

四

東京帝国大学教授を辞して、朝日新聞に入り、文芸欄を担当して、新聞小説を連載しはじめた漱石と違って、鷗外

は、日露戦争での功もあって、再び、軍の要職に返り咲き、明治四十三年に、漱石の『三四郎』を意識した『青年』を發表する一方、「昂」・「三田文学」・「新潮」・「中央公論」などでの活躍が目立つが、〈大逆事件〉前後の国内情勢の中で、文芸面での活躍の一面、政府・軍内での立場上からの揺れを露呈せざるを得なかった。

こうして、鷗外は、官を辞することもなく、明治四十年代を生きるわけであるが、『妄想』にすでに見られたところの「不平家」は、それに先んずる『Resignation』の說（明治四十二年・十二月〈新潮〉）に、当時の文芸界での活躍者として、花袋・藤村・白鳥・薫・荷風の名を挙げ、さらに、

それと少し距離のある方面で働いてゐるのは夏目君に接近してゐる二三の人物なものでせうか。小説以外の作品を出してゐられる諸君は数へません。

そこで私がさう云ふ諸君の下風に立つてゐて、何だか不平を懷いてゐるものとても認められてゐるらしく見えます。私の言ふことを愚癡、厭味と極められてゐる意味はさう云ふ意味かと思ひます。

と述べているが、こういう〈不平家〉・〈愚癡〉と思われることからは、いままで述べてきた諸作品に、直接的・間接

的に見えてゐる鷗外の態度であつて、鷗外自身は、決して諦念に達するどころか、それを望める状況には置かれていなかったと考えられる。

これらから、鷗外は自らを〈不平家〉と考えざるを得ない面を、作品の中で繰返し語ることにしたと思われ、『カズイスチカ』・『妄想』に見られる主人公は〈不平家〉としてあらわれている。これは、〈大逆事件〉前後の国内情勢や〈無政府主義者〉問題と重なつて、鷗外が、その立場を明らかにすることを求められていた状況にあつたといえる。しかし鷗外は、前章までに挙げた諸作品では、『かのやうに』に示されているように、巧みに、登場人物の役割を配分することで、容易に自己の立場を明確には示さない形をとり、その苦渋は、それによって、より深まるようになつていたと考えられる。その後に来るものは、鷗外が五条秀麿や渡辺参事官という同名の人物を作品に登場させ、それが、前述したように、特に内容らしい内容もない作品であることから、鷗外の無聊や虚無が垣間見られるのである。

『妄想』に見られた、独逸留学時の西欧哲学がことごとく自己の拠つて立つ立場を明らかにしてくれる〈哲学〉でなく、すべてを、〈虚無の哲学〉と見ている点は、大きな

問題であつたに違いない。四十年代に書かれたゆえに『妄想』の主人公の若き日の懐古は、決して懐古にとどまらぬ。その後の生きる指針がはっきりと示されていない限り、『妄想』での〈不平家〉と学ぶべき〈哲学〉の無いことは、この四十年代の鷗外自身の現実であつた。『カズイスキカ』での主人公の父の諦念に達するには程遠い心境にあつたと考えられる。

こうした鷗外の心境の反映と考えられるのは、これら諸作品が、いずれも、次のようなものに限定されることからである。

- 一、登場人物が限られ、単一の場面が舞台になっている。
- 二、会話部が多く、主題が明確である。
- 三、『妄想』や『かのやうに』はやや長いものではあるが、主人公の述懐であつたり、論点が明らかである。
- 四、同一人物名が作中人物に登場し、関連作品と考えら

れる。

五、筋らしい筋もなく、単に主人公の無聊や虚無的な心情のあらわれにすぎない。

右にあげたように作品の構成面を考えても、鷗外の心境の吐露と考えてよからうと思われる。

むすび

以上述べてきたように、明治四十年代の鷗外は、官にあつては望むべき最高の地位にありながら、心境としては、きわめて多難で、揺れの多い日々を過ごしたと考えられる。この状況は、明治天皇の崩御につづく、乃木將軍夫妻の殉死の衝撃を受けるまでの鷗外の心中の思いであつて、最晩年の五年の在り方への基盤にもなったものであつた。

(註) 引用文については、筑摩書房版『森鷗外全集』に拠つたが、引用文中の漢字は新漢字体に改めた。

(本学助教授 国文学)